

脳内の酸素量が増し
自然治癒力が高まる!

萩原秀紀 著

萩原カイロプラクティック院長・柔道整復師・鍼灸師

工藤千秋 監修

くどうちあき脳神経外科クリニック院長



「鼻の横を と病気が治る 押す」

腰痛、五十肩、高血圧、
リウマチ、花粉症、
アトピー性皮膚炎、
パーキンソン病、
脳卒中の後遺症に
効いた!

最先端の脳機能計測器で効果が
実証された「奇跡の急所」を初公開

ビタミン文庫

マキノ出版

監修のことば

くどうちあき脳神経外科クリニック院長

工藤千秋

皆さんは、「補完療法」という言葉をご存じでしょうか。

主なものとしては、例えばアロマセラピー、音楽療法、カラーセラピー、英国式足裏療法、マッサージ、鍼治療、ヨガ、気功などが挙げられます。

いずれの療法も、体に備わった病気を治そうとする力「自然治癒力」を癒しの面から高めることで、ヘルスケアにアプローチしていく手法が特徴です。

現代医療として認められている西洋医学も漢方医学も、それぞれ優れた医療ですが、どちらも完全とは言えません。そもそも、医療に完全はないのです。どんな治療にも長所もあれば、短所もあります。

私も、臨床医としての長い経験の中で、それを身にしみて知らされてきました。

しかし、不完全な現代医療を、より完全なものに近づけていくことは不可能では

ありません。なにより、病める人を救う医療者として、常に求め続けなくてはならないことでもあります。

補完療法は、そのために大きな役割を果たす——。私は、そう確信しているのです。

私は2001年に東京・大田区に「くどうちあき脳神経外科クリニック」を開設しました。専門である脳神経外科や漢方医学とともに、補完療法も積極的に採り入れた医療を行っています。現在、その数は十数種類に及びます。

世の中には「癒しに効く」とうたって、さまざまなおセラピーと称するものがあふれています。その中には、医学的にはまったく根拠のない、怪しげな療法も少なくありません。

そんな玉石混淆の中から、真に心身の癒しとなり、ヘルスケアに役立つ「玉」を見極める必要があります。

そのため、補完療法の選択に際しては、1つの厳しい関門を設けています。その判定基準が、エビデンス（科学的実証）、医療としての効果が認められるかどうかという客観的な根拠です。

具体的には、MRI（磁気共鳴画像装置）やCT（コンピュータ断層撮影装置）のほか、脳機能NIRS（近赤外光を用いた脳機能計測器）や、最新の脳波解析技術（NAT& DIMENSION）など、さまざまな脳科学的なアプローチを行います。そこで示されたデータは脳機能を探る上で、信頼できる指標になるのです。

私には、西洋医学にしろ、各種セラピーにしろ、どの療法が上とか下という考えは一切ありません。すべてが柱であり、治療のための貴重な戦力です。

互いに足りないところを補い合い、得意なところを活かし合うことで、日々の臨床に大きな相乗効果を上げています。

もちろん、その目的は、ただ1つ。1人ひとり、すべての患者さんの心と体の改善であり、やすらぎです。

厳選された補完医療と、現代医療の有機的な融合。そこにこそ、患者さんにとって真に癒しとなる医療が生まれるのではないかと、私は確信しています。

そんな私にとって、本書の著者である萩原秀紀先生との出会いは、とても貴重な経験となりました。

まず心を打たれたのは、萩原先生のお人柄です。真実・真理を究めようとするたゆまぬ探究心と、病に苦しむ人々を救おうとする真摯な姿勢には、同じく医療に携わる者の1人として心から敬意を表します。

補完療法としても、小鼻の横にある急所「天迎香」を押すメソッドには、触発された点が多々あります。

天迎香を押すことで、難病も含むさまざまな病気・症状が実際に改善していること。そして、脳機能NIRSを用いた検証など、いくつかの科学的検証で、その有効性に一定の実証を得ている点も、十分評価に値します。

また、非常に独創的であり、生体を傷つけない手法であること。誰もが手軽に、安心してその効果を享受できる点も見逃せません。

天迎香の可能性には、私自身、本書の監修者という立場を離れても、強い関心と期待を抱いています。病に悩む多くの人々に、この新しいメソッドが大きな力とも光ともなりますように。

私は、東洋医学やツボ療法の有効性には強い関心を持っています。

ただ、その方面に関しては専門外なので、天迎香への刺激による、こうしたさまざまな病気・症状の改善効果については、あくまでも西洋医学的な考察・推論と前置きして、お話ししたいと思います。

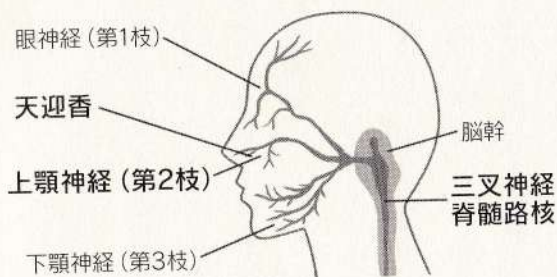
私たちの顔には三叉神経という、顔面の知覚と運動に働く重要な神経が走っています。三叉神経は上中下3本に分かれています。いずれも延髄にある三叉神経脊髄路核につながっています。

ここは自律神経系も含めたさまざまな神経の、いわば「コントロールセンター」です。各種ホルモンの分泌調整、血圧や血流の調整なども、脊髄路核が基地的な役割を果たしています。

そして、この三叉神経の真ん中の1本（上顎神経）の末端が、ちょうど天迎香の位置辺りに広がっています。

このことから、天迎香を押すことにより、同時に三叉神経も刺激され、神経のコ

三叉神経と天迎香の位置関係



三叉神経の真ん中の1本（上顎神経）の末端が、ちょうど天迎香の位置辺りに広がっている。

ントロールセンターである脊髄路核を活性化させることで、さまざまな病気や症状の改善を促すのではないかと推察されます。

ただ、ツボ治療というのは、医療として有効なことは確かですが、まだまだ未解明な部分も多くあります。

その意味では、三叉神経との関係は、天迎香効果の一部ではあっても、すべてではないかもしれません。

この点は、私個人としても強い興味を持っており、今後の解明を見守りたいと思っています。

第4章

鼻の横を押して
病気を治した体験談

なりつつあります。

歩き続けても腰痛は出ませんし、以前は不安だった電車やバスも普通に利用できるようになりました。

3日に1度は飲んでいた頭痛薬も、まったく飲んでいません。

めまいは多少残っていますが、頻度も重さも、前とは比べものにならないくらい改善しています。

最近、そろそろ就職活動をしよう、ジョギングで体力もつけたい、と前向きなことばかり考えられるようになりました。

私に生きる希望をもたらしてくれた萩原先生に、心から感謝します。

脳外科医・工藤千秋先生のコメント

腰痛や頭痛など、天迎香刺激と痛みとの関係を考えるとき、私の頭には「ゲートコントロール理論」という言葉が浮かびます。

大まかに言うと、神経には痛みを脳に伝える細い神経と、それをブロックする太

い神経とがあります。

例えば、子どもが転んでひざを打ったとき、お母さんが「痛い、痛い、飛んでいけー」と、ひざをさすりますね。あれは単なるおまじないではなく、科学的にも意味があるのです。

ひざを打った痛みは細い神経を通過して、痛みを脳に伝え続けます。一方、お母さんの優しくなでる皮膚感覚は、太い神経を通過して、痛みより速いスピードで脊髄や脳幹（脳の入り口）まで到達します。

そして、痛みが奥の脳皮質まで伝わらないよう、そこにある「ゲート」を閉じます。これが生理的に、痛みを抑制させるのです。

天迎香への刺激は三叉神経に働くことで、このゲートを閉めさせる神経を活性化させる——。それも、痛みを軽減する仕組みの1つになっているのではないかと思われまます。

第4章

鼻の横を押して
病気を治した体験談

主人ですし、細かい気づかいもしてくれました。萩原先生の治療院にも、ずっと付き添ってくれました。

なかなか面と向かつては言いにくいものですが、この場を借りてお礼を言いたいですね。

おかげで、友人との食事会に出かけたり、主人と旅行に行ったり、以前の楽しい生活が戻ってきました。

最初の日に奇跡だと思った動作は、今ではすべて普通にできるようになりました。なんだか、どこかへ忘れてきた体が、ようやく自分の元へと帰ってきたような気がします。

脳外科医・工藤千秋先生のコメント

パーキンソン病の症状改善においても、1つの可能性としては、やはり脊髄や脳幹との関係が考えられます。

つまり、天迎香への刺激が三叉神経の元でもあり、さまざまな神経のコントロー

ルセンターでもある脳幹を活性化させる。それが運動機能の回復を後押しするというものです。

それと、これはパーキンソン病だけでなく、ほかの病気や症状の改善にも共通することですが、天迎香の刺激には、心や体を癒す効果もあると考えられます。私自身が体験して感じたことです。

人は癒されたと感じたとき、内に閉ざされていた負のエネルギーが解放されて、体にはプラスのエネルギーが流れ込みます。

その結果、体の細胞の1つひとつがより活力を増すことで、免疫力（病原体などに抵抗して病気を防ぐ力）が上がったり、意志とは無関係に内臓や血管を調整する自律神経のバランスが整えられて自然治癒力（体に備わった病気を治そうとする力）が高まったりします。

天迎香への刺激は、この癒し作用に優れており、それが健康効果のベースにもなっているように思います。

第4章

鼻の横を押して
病気を治した体験談

りでした。

天迎香を押し続けてから1カ月もたたない間に、顎関節症はすっかり改善したのです。

思いつきり口を開けて笑えるし、食べ物を口いっぱい頬ばっても平気になりました。普通の人にとっては当たり前のことかもしれませんが、私にとって、これほどうれしいことはありません。

あれから10年ほどたちますが、花粉症とも完全に縁が切れました。以前は憂うつだった春の訪れも、今ではとても待ち遠しく思えます。

脳外科医・工藤千秋先生のコメント

顎関節症は、ものを噛むときに使う咀嚼筋などに激しい痛みが出たり、あごが開きにくくなったりする病気です。

また、口を動かすと、ゴリゴリと音がするのも特徴の1つです。

子どもから大人まで幅広く発症しますが、中でも20〜30代の女性に多く見られる

傾向があります。

はつきりした原因は現代医学でもわかっていませんが、例えば、幼少期に軟らかいものばかり食べたり、頬杖をついたりする生活習慣も大きく影響していると考えられています。

萩原先生が言われるように、そうした生活習慣が顔のゆがみを引き起こす要因と
いうのも、うなずけるところです。

天迎香を刺激することで顔のゆがみが矯正される、という点は、私も強い関心
と期待を抱きました。

萩原先生の多くの臨床経験のほか、鶴見大学歯学部^{つるみ}に依頼された実験（106ページ参照）でも部分的ではありますが、効果が認められているようです。それが顎関節症の改善につながったことは、十分考えられます。

第4章

鼻の横を押して
病気を治した体験談

私の専門である脳も含め、体の痛みというのは、それが出る生理的なメカニズムはわかっているけれども、発症する原因となると、実は現代医学でも明らかになっていない点が多いのです。

五十肩も同様で、腱板の損傷など、原因が明らかかな肩の障害以外は、便宜的に五十肩と呼ぶ傾向もあるようです。

神崎さんの五十肩の痛みが緩和したのは、現代医学的に考えれば、宮崎さんのケース（122ページ）でもお話した「痛みのゲートコントロール」が、天迎香を押すことで効果的に作用したのではないのでしょうか。

また、天迎香を押すと、三叉神経を刺激し、それが結果的に、さまざまな神経やホルモン分泌などをコントロールしている脊髄路核という場所を活性化させることが考えられます。その面からの効能も、無関係ではないと推測されます。

40年間の 治療家人生で 描いた夢

第5章

著者プロフィール

萩原秀紀

(はぎわら・ひでのり)

1949年、神奈川県生まれ。柔道整復師、鍼灸師、あん摩マッサージ指圧師。萩原カイロプラクティック院長。(株)自然治癒力活性医学研究所代表取締役。神奈川大学経済学部、立正大学仏教学部、駒澤大学仏教学部卒。高校2年生のときに虹彩炎から緑内障となり、失明に備えて柔道整復師、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の各免許を取得。75年、横浜市に大岡整骨院を開設。カイロプラクティック療法を専門に研究し、アメリカ、中国など十数回にわたり海外研修に参加して研鑽を重ねる。蘇生の急所である「天迎香」を自ら発見し、それを刺激するオリジナルのマウスピース等を用いて、脳機能改善のための施術を行う。肩こり、腰痛から、リウマチ、パーキンソン病などの重篤な症状の改善にも定評がある。
ホームページ <http://www.kaikai21.co.jp/>

監修者プロフィール

工藤千秋

(くどう・ちあき)

1958年、長野県生まれ。くどうちあき脳神経外科クリニック院長。東京脳脊髄研究所所長、臨床脳電位研究会事務局長、日本脳神経外科学会専門医、日本アロマセラピー学会認定医。英国パーミンガム大学、労働福祉事業団東京労災病院脳神経外科、鹿児島市立病院脳疾患救命救急センターなどで脳神経外科を学ぶ。89年、東京労災病院脳神経外科に勤務。同科副部長を務める。2001年、東京都大田区にくどうちあき脳神経外科クリニックを開設。脳疾患はもちろん、認知症やパーキンソン病、痛みの治療にも情熱を傾け、心に迫る医療を信条とする。漢方やアロマセラピーなど各種補完療法も導入。著書に「あきらめない！その頭痛とかくれ貧血」(文芸社)、編著に「医療者とセラピストに役立つ新脳波技術「NAT」&「DIMENSION」エビデンスに基づく認知症補完療法へのアプローチ」(ばーそん書房)がある。
ホームページ <http://www.kudohchiaki.com/>

践できます。天迎香が世界中の人々の健康を守ることになったら、こんなに喜ばしいことはありません。

そのためにも今後は全国各地で、天迎香の押し方を直接指導するセミナーを開催していきます。日程などはホームページで随時紹介する予定です。

また、さまざまな活動団体や各国出先機関を通じて、天迎香の存在を世界に広めようと働きかけていますが、私1人の力では限界があります。読者の皆さんの中でも、よいアイデアがあれば、ぜひ教えていただければ幸いです。

最後に、本書の企画や執筆に多大なご尽力をいただきましたマキノ出版書籍編集部
の河村伸治さん、出版プロデューサーの藤田大輔さん、文章指導をいただきました竹
内有三さん、そして、本書の監修をご快諾いただきました工藤千秋先生に心より感謝
申し上げます。ありがとうございました。

2013年9月

著者記す